

Edmund Spenser の *Fowre Hymnes* における 数のシンボリズムについて

大 木 富*

On the Symbolism of the Numbers in
Edmund Spenser's *Fowre Hymnes*

Tomu OHKI

Abstract

The purpose of this paper is to consider the symbolism of the numbers in Edmund Spenser's *Fowre Hymnes*. In the Renaissance Pythagoreanism was associated with Cabala. In *Fowre Hymnes* Spenser represents through number symbolism the Hermetic-Cabalist philosophy he inherited from the circle of John Dee. The first section analyzes the symbolic numbers 6, 7, 10, 11, 32 and 33 in *HL*, *HHL*, *HHB*. These numbers suggest *The Golden Asse*. The second section attempts to interpret the intricate numerology of *HHB* which provides an essential key to the philosophical content. The last section discusses the influence of John Dee's *Monas Hieroglyphica* on *Fowre Hymnes*.

Amoretti と *Epithalamion* が出版された1年後の1596年に、*The Faerie Queene* 6巻及び *Fowre Hymnes* が出版された⁽¹⁾。これらの詩作品における数秘術的構造に関しては、A. Fowler, A.K. Hieatt 等を代表とする優れた研究が生み出されている。それらの研究成果から明らかなように、Spenser は非常に巧みにその詩作品に数秘術の数の象徴性を付加する⁽²⁾。但し、*Fowre Hymnes* に関して、数秘術の見地からのアプローチは余り試みられていない。

小論では、Spenser の *Fowre Hymnes* における数の象徴性を解明し、Spenser に対するルネッサンスのネオ・プラトニズムの核であるヘルメス主義・カバラの影響を考察するものである。Jon A. Quitslund は 'Sapience' の問題の究明を通して、共存する3つの伝統：キリスト教、プラトニズム、カバラの *Fowre Hymnes* に対する影響を指摘した⁽³⁾。

Gabriel Harvey との往復書簡から、イタリア哲学に精通したことが理解される Spenser への Ficino, Pico, Bruno 等の影響は、Sir Philip Sidney 及び彼の

グループとの交流を媒介としたキリスト教カバラ主義者 John Dee の哲学に起因すると考えられる⁽⁴⁾。Quitslund は、Spenser がケンブリッジ時代に既にカバラを知っていたと推論している⁽⁵⁾。

1. *Fowre Hymnes* と *The Golden Asse*

Fowre Hymnes の *HL*, *HB*, *HHL*, *HHB* の各スタンザは、1連7行で形成されており、そのスタンザの数は順に44, 41, 41, 43, 全部で169個である。そこで数秘術の見地から、まず第一に注目すべきことは、*HL* の第33スタンザのみが唯一例外として6行になっていることである。

Thou art his god, thou art his mightie guyde,
Thou being blind, letst him not see his feares,
But cariest him to that which he hath eyde,
Through seas, through flames, through thou-
sand

swords and speares :

Ne ought so strong that may his force with-
stand,

With which thou arimest his resistlesse hand.

(HL33)

当該箇所について Einar Bjorvand は、*Fowre Hymnes* の 1596 年の quarto 版と 1611 年の folio 版を比較検討し、故意に 6 行にしているという結論に達する⁽⁶⁾。その根拠として、Spenser が特にこの作品に限っては印刷に立ち会うほどの慎重さを示していた事実と、このような「詩行の変更によるテーマの強調という数のシンボリズム」の伝統を挙げている⁽⁷⁾。そして、この第 33 スタンザの詩行の変化（欠落）に、詩人としての未熟さを愛の未熟さに重ねて表現する Spenser の創意・意図があったと推測する。

また、Bjorvand は「33」という数の象徴性：キリストの生涯（伝統的にキリストの生涯は 33 年であったと考えられてきた）に着目し、愛の神としてのキューピッドとキリストとのコントラストを表現するものであると考える。HL のこのスタンザは過度のキューピッドの賞賛を語り、HHL の第 33 スタンザではキリストの馬屋での誕生をうたう、すなわち、「33」という数によって「自負と謙遜」のコントラストを形成している。

Bjorvand は、数の問題に関してあくまで「33」だけを問題としているが、Spenser が意識的にその行数（7 行）を変化させたこのスタンザは、さらに多くの数の象徴を提示する。

全部で 44 個のスタンザを持つ HL は、この第 33 スタンザを境として、その前に 32 個の、その後に 11 個のスタンザが存在するわけであり、「32」と「11」という数が浮かび上がってくる。また、このスタンザは後ろから 12 番目にあることから、「12」と「6」（行数）という数字もここに現れてくる。これは、「数の神秘的融合」の理論から導き出される数と同じである {33（スタンザの番数）= 3+3=6；6（先に求められた数）+6（行数）=12}。

数のシンボリズムの伝統から、上記の数の意味を簡単に概観すれば⁽⁸⁾、キリストの 33 年の生涯以外に、神との関係に着目すると、ヘブライ語の聖書では神の名は 32 回、英語の聖書では 33 回出てくる。また、後述するようにカバラにおいて「32」は、そこから万物が創造された重要な数である。

さて、HL の後半の 11 個のスタンザの内容を考えると、第 42 スタンザに「快楽という娘」（‘thy daughter Pleasure’）が登場するが、これは、*Variorum Edition* の注釈者も指摘しているように、Apuleius の *Meta-*

morphoses の「Psyche と Cupido の恋愛の物語」を基礎とする⁽⁹⁾。

Apuleius の物語の Book VI, 24 では、Psyche が許されて Cupido と結婚し、Voluptas（快楽）という名の娘を身ごもる。この物語の導入の例としては、*Fowre Hymnes* 以外には、例えば、*The Faerie Queene* の Book III, vi, 50 や *Muipotmos* の 130～36 行目などが挙げられる。

また、この第 33 スタンザでキューピッドは「盲目」であるとされているが、このことが、Apuleius との結び付きをさらに強く意識させる。Bjorvand が指摘するように、第 33 スタンザでのキューピッドは、愛の神であると同時に愛の導き手である⁽¹⁰⁾。HL の語り手はその盲目の導き手に先導され、盲目の愛を生きるわけである。Ellrodt は、Apuleius やネオ・プラトニスト達にとって Psyche と Cupido の神話は、神聖（神）と魂の合一の象徴であったと指摘している⁽¹¹⁾。Beroaldus の *Commentarii Apuleiani* (1516) によると、Psyche は「盲目」になることで神（アモル）との合一を達成できる⁽¹²⁾。Pico も愛は盲目でなければならないと説くが、Bruno は、*De gli eroici furori* (1585) 中の 9 つの盲目の愛の定義の 1 つで「神は沈黙によってより崇拜され、目を閉じての方がもっとよく見える」とする⁽¹³⁾。後述するように、Bruno は、この Apuleius の物語を下敷きにした作品を書いている。

そこで、まず先の「11」という数字との関連で考えると、Apuleius の *Metamorphoses* の全巻数が「11」であり、その 11 巻目の Isis の秘義参入への許可は、10 日間の《禁欲・節制》ののちの 11 日目に与えられる（実際は 3 回秘儀参入が行われる：11×3）。また、この Apuleius の物語の中の「Psyche と Cupido の恋愛の物語」は第 6 巻目にあり、それは 32 節で構成されている。これらの数字は、Spenser の問題のスタンザが提示する数：6, 11, 32, 33 と一致する。

ルネッサンスにおいて、古代エジプトの英知を伝える *Corpus Hermeticum* 及び *Hermetica* の 1 書：Asclepius は Ficino が Platon の著作よりも先にその翻訳に取りかかったほど、とりわけ重要なものと認められ、Apuleius は、Asclepius の翻訳者として非常に高く評価されていた⁽¹⁴⁾。

その Apuleius の *Metamorphoses* は 1525 年に Fir-enzuola が伊訳し、1566 年に英訳が W. Adlington によって *The Golden Asse* と題されて出版されるなど当時広く親しまれていた⁽¹⁵⁾。Agrippa も *De vanitate*

scientiarum (1526) で象徴としての「ロバ」を使うが、Agrippa の流れをくむ Bruno は、Apuleius の *The Golden Asse* を「土台」として 1585 年 *Cabala del Cavallo Pegaseo* と題するカバラ関係の著作を英国で出版している。Bruno の「ロバ」は、カバラの Ein-Sof (完全なる無としての神) を目指す「知ある無知」の象徴である。神は五感や理性的知では到達できず、それらを放棄、超越した無知によってのみとらえることができる。これは先の盲目の定義と等しい⁽¹⁶⁾。当時、渡英していた Bruno は、Sidney 及び彼のグループと親交を結んでいたが、そのグループと Spenser の関係を考えれば、Spenser が Apuleius の物語、及びそのエジプト的・魔術的な意味を意識していた可能性は非常に高いと考えてもいいだろう。

このように、*HL* が提起する数のシンボリズムは、*Fowre Hymnes* と Apuleius、実は Bruno、Dee との関連を強く意識させる。

実は、先の Bjorvand の指摘した「33」の数のシンボリズムが語るものは、Apuleius の物語であったのである。*HL* に対応して *HHL* の第 33 スタンザの 3 行目には「ロバ」('humble Asse') が登場する。

さて、*Fowre Hymnes* におけるもう 1 つの顕著な数のシンボリズムは、*HHB* の第 27 スタンザで展開する。このスタンザは、これまでその正体が論議的となってきた 'Sapience' が登場するスタンザである⁽¹⁷⁾。Bjorvand は、*HHB* の第 27 スタンザが *Fowre Hymnes* 全 169 スタンザ中 153 番目に当たることから、ここに伝統的な数秘術を読みとる⁽¹⁸⁾。この「153」は、1 から 17 まですに足した合計 ($1+2+3+\dots+17=153$) であり、「17」、あるいは「10」と「7」という象徴的数が出現する。

There in his bosome *Sapience* doth sit,
The soveraine dearling of the *Deity*,
Clad like a Queene in royall robes, most fit
For so great powre and peerelesse majesty.
And all with gemmes and jewels gorgeously
Adorn'd, that brighter then the starres appeare,
And make her native brightnes seem more
cleare.
(*HHB*27)

「153」は、古代キリスト教教父たち、数秘学者たちから様々な解釈されてきた、伝統的によく知られた象

徴の数であった。例えば、これはペテロがとった魚の数であり、「10」(モーゼの十戒)+「7」(聖霊の 7 つの贈り物)と分析されることから、愛によって神の掟を果たす信者たち(神の選民)を指す⁽¹⁹⁾。

しかし、ここで注目すべきことは、先の Apuleius の物語との数的類似である。*The Golden Asse* の 11 巻目では、まず第 1 節で「7」が、また第 10 節で「10」が神秘的数として言及・強調されている。この Isis の秘儀参入において重要な意味を持つ 2 つの数字が、'Sapience' のスタンザで暗示、強調されることは、Apuleius との結びつきを強く示唆する。このように、第 1 番目の賛歌である *HL* において、数のシンボリズムを用いて暗示された Apuleius の物語が、この最後の第 4 番目の *HHB* においても数秘術によって連想されるわけである。このことは、*Fowre Hymnes* の基盤となるものが、ルネッサンスに広く受容された *The Golden Asse*—ヘルメス・カバラの物語—であることを意味する。

Yates は、*HHL* と *HHB* を天と地の上昇と下降を扱うヘルメス主義的な作品であると見なし、F. Giorgi の哲学の影響を *Fowre Hymnes* に読み取ろうとする⁽²⁰⁾。

Isis の「7」および「12」の衣は、グノーシス主義、ヘルメス思想によれば魂の天界の旅を象徴するものであり⁽²¹⁾、また、C.G. Jung は Apuleius を例にとり、Isis の秘儀を魂の「上昇及び下降」、特に太陽への「昇華」を主眼とするものだとしている⁽²²⁾。

すなわち、Isis の秘儀参入を結末とし、その参入による救いに預かるための試練・忍耐の物語である *The Golden Asse* を数秘術によって連想させる真意は、このヘルメス主義的「上昇・下降」、カバラを語ることにありと言えよう。ルネッサンスにおいて復権するその両思想は、ともにグノーシス主義を共有する。

2. Ogdoas (第 8 天) と Tetraktys (4 元数)

上記の数的シンボリズムが提出した命題 (*Fowre Hymnes* の語る内容がヘルメス及びカバラであること)は、*HHB* の象徴的数を解明することで、より鮮明なものとなる。

HHB の第 13 と 14 スタンザにおいて、Ptolemaios の宇宙像の上位に天使の世界が描写されるが、この天使の数は「8」であり、伝統的な 3 つ組 3 隊の 3 区分ではなく、2 つ組 4 隊とされている。*HHL* の第 10 スタン

ザでは、伝統的な天使論(3つ組3隊9人)に言及しており、「9」から「8」に変更する強い意図・理由が、ここに作用していると考えられる。スタンザの置かれている位置: 13と14を足せば「27」となるわけで、1者たる神を加えれば、ここに存在する数は1, 2, 3, 4, 8, 9, 27となり、数的シンボル: Platonic Lambdaを形成する数が、すべて存在することになる⁽²³⁾。このPlatonic Lambdaとは、宇宙を生み出す世界靈魂の誕生の過程を示す数的象徴である。詩人は、ここに天使の世界を置き、神の創造した宇宙の描写を完成させるとともに、数のシンボリズムによって神の天地創造を象徴させる。但し、この象徴の主眼は、Pythagorasの数秘術の喚起にあり「8」(2×4)の強調にある。

次の第16スタンザで数え上げられる神の属性(流出)の数も「8」であり、第13・14スタンザと同じく第16スタンザも天地創造を主題とする。

Whose utmost parts so beautifull I fynd,
How much more those essentiall parts of his,
His truth, his love, his wisdom, and his blis,
His grace, his doome, his mercy and his might,
By which he lends us of himselfe a sight.

(HHB16, ll. 3-7)

Hopperは、難解で有名な「Almaの城」(*The Faerie Queene*, II. ix. 22)の数秘術の分析に際し、HHBの「流出の数: 8」に言及し、「8」が表す意味として調和、音楽的ハーモニー、理性と性欲の調和(Pico)等の例を挙げている⁽²⁴⁾。

ただ、この神の流出(天地創造)を象徴する数が「8」であるということは、すなわち、宇宙の天球層の数を8つと考えることに等しい。ルネッサンスにおける通常のPtolemaiosの宇宙像は、10個の天球で構成されているが、「8」という観点から見ると、天体のハーモニーを奏でる「最下音を地球が表すPythagorasの8弦琴」というPythagoras派の宇宙像も想起されるものの、ここでは、*Corpus Hermeticum*の語る宇宙像が示唆されている。その宇宙は、最上位に至高の神の世界を配し、ogdoas(第8天・恒星天)と7つの遊星天から成る8つの天球層で構成されている⁽²⁵⁾。上昇(昇華・帰昇)する魂は、神の英知(ヌース)・栄光、造物主(Demiourgos)が座する第8天に至ってogdoadic hymn(第8天での神の賛美)を開き、歌い、その上の至高の神と一体化する⁽²⁶⁾。

このスタンザの直前の第15スタンザで言われるように、人間は‘the Highest’(至高の神)を描写出来ず(=不可知)、その神の8つの可視的世界をかい間見るのみである。後述するように、*Corpus Hermeticum*の1書: *Poimandres*(Ficinoは*Pimander*と呼ぶ)の著者と同じく*Fowre Hymnes*の語り手は、魂が可視的世界を越えて不可知の神へと昇華することをうたうのであり、HHBをogdoadic hymnだと言ってもいいだろう。

このグノーシス主義的第8天の概念はカバラにも導入され、ogdoasは神の栄光・力を表すAzbogahというヘブライ語に翻訳されている⁽²⁷⁾。このヘブライ語は、カバラのgematria(文字の数値への変換)によって「8」という数値に変換される。Yatesは、Picoがこの第8天での賛歌の教えを継承していると論じるが、それはFicinoからPicoにおいてヘルメス主義とカバラが結びつくことの証左である⁽²⁸⁾。*Corpus Hermeticum*が伝える「8」はカバラでも重視される。

このような「8」の重視を、Spenserがその間接的影響下にあるJohn Deeも、カバラの書: *Monas Hieroglyphica*〔数的象徴としてのmonad(単子)論〕で展開している⁽²⁹⁾。Deeはまた、ヘルメス主義的科学である錬金術を信じていたが、錬金術師Paracelsusも*Ein ander Erklärung der gantzen Astronomie*で「8」に高位を与えている⁽³⁰⁾。

Deeの*Monas Hieroglyphica*と*Fowre Hymnes*との関係は後にまた触れることになるが、冒頭で、象形文字としての単子の記号を数学的・魔術的・カバラ的・神秘的に説明したものであると述べられているように⁽³¹⁾、この書はカバラの神秘的解釈学の技術によって、宇宙の秘義・創造の神秘を明らかにすることを目的とするカバラの書である。その技術として、Deeはある一定の規則に従った文字の変換であるカバラのgematria, notariacon, tzyrurphの3つを挙げている⁽³²⁾。ルネッサンスのキリスト教カバラの源泉であるスペインのカバラの重要な理論家Abraham Abulafiaは、その3つの技術に精通することで「ヘブライ語のアルファベット22文字の組み合わせの術」を開発した⁽³³⁾。そして、Deeによれば単子の記号は宇宙全体を体現する象徴であり、彼は、その記号に含まれる十字の説明に関して同書の*Theorema VI*で「8元数」(octonarius=ogdoas)に言及する。

Sicque, ibidem, secretissime, etiam Octonarius,

sese offert; quem, dubito an nostri Praedecessores, Magi unquam conspexerint: Notabisque maxime.⁽³⁴⁾

このように、簡単には到底わからないように現出するとされる8元数の主張は、「8」の重視以外のなにものでもないだろう。

そして、この「8」を含む数的象徴である単子の記号は、monad (1) を含む tetraktys (4元数; 4つなるもの) に集約される。同じく第13, 14スタンザで「8」が導き出した Platonic Lambda (天地創造の象徴) も、この第16スタンザの「8」が示すヘルメス主義の宇宙像も、ともに tetraktys の問題に繋がる。「8」は「4」の倍数であり、HHB でのこのスタンザの位置: 「16」も「4」の自乗であり、ともに「4」を基本とする。また、「4」は *Fowre Hymnes* (天と地) の大きな枠組みを構成する数であり、振り返れば、HL の象徴的数も4つであった。Dee は *Theorema VIII* で tetraktys を次のように定義する。

Quaternarii, praeterea Expansio Cabalistica, secundum usitatae Numerationis Phrasim, (dum dicimus, Unum, duo, tria, quatuor) Denarium, summatim exhibet. Ut & ipse Pythagoras dicere solebat: Nam 1. 2. 3. & 4. decem consiciunt.⁽³⁵⁾

Pythagoras 派の人々は、monad (1者) としての神が自然の源泉である tetraktys を生み出すというように、数学的形で天地創造を表現する⁽³⁶⁾。その創造の数式の一例が Platonic Lambda の数的象徴である。「4」を構成する数: 1, 2, 3, 4 の総計は、物質世界における完全数「10 (decad)」となる。Pythagoras 派の伝統に従い、Dee は「4つなるもの」(地・水・火・風の4元素など) から森羅万象・コスモスは10を限度として派生すると説くが、その際この伝統をカバラの tetragrammaton (「神聖四文字」: YHWH というそのすべての力が凝縮したもののとしての神の名であり、その神の名前から全宇宙が生み出された文字) と結び付けている⁽³⁷⁾。このように、上記の3つのスタンザが提示する数「8」は、tetraktys を示唆する。

Heninger は、Pythagoras の tetrad (tetraktys) の伝統から *Fowre Hymnes* を読み解けるとする⁽³⁸⁾。しかし、Dee 同様、*Fowre Hymnes* にとっても、この

tetraktys はカバラの性格を有する。

Dee の蔵書に含まれていた F. Giorgi の *De harmonia mundi* (1525) が説くキリスト教カバラでは、キリスト教の天使と Sefirot は対応し、8つの天球層(7つの惑星と黄道12宮)にそれぞれの天使の影響力が割り当てられる⁽³⁹⁾。同様に、HHB で神の名前と言えるその属性と天使の数を同一にすることは、Giorgi (すなわちカバラ) の影響を裏付け、HHB の天使も神の属性も、ともに Sefirot の教義を語ると考えられる。

カバラにおいて、神は「全」(Sefirot) であり、同時に「無」(Ein-Sof) である。完全なる無としての Ein-Sof の形相のもとに隠されている神が、流出としての創造である Sefirot の形相によって自らを明らかにする。通常、この Sefirot は10の名前と考えられる⁽⁴⁰⁾。

第16スタンザで語られる神の名称に関して、Padelford は Calvin の説との類似を見いだすが⁽⁴¹⁾、'utmost' の示唆する「全能」、'beautiful' の「美」を含めれば「10」となり、カバラの Sefirot の数と一致するとも言える。先に見たように、4元数から派生する「8」は「10」まで延長される。また、Calvin は、神の顕現を「自然」を通して2つ、「人間への扱い」を介して6つに2大別するが、Spenser は同様の区分を行ってはいない。

天使も神の属性も Sefirot であると考えれば、先の天使のスタンザで伝統的な天使の階級において最下位であるはずの天使・大天使が、逆に最高位にランクされている事実にも説明がつく。この逆転の示唆するものは「逆立ちした木 (宇宙木)」である。カバラでは Sefirot を「木」特に逆立ちした木で象徴する⁽⁴²⁾。この木の象徴の存在は、第16スタンザでの流出が Sefirot であることを補完・強調する。また、カバラでは Sefirot のヒエラルキーを固定化させない場合もある⁽⁴³⁾。

カバリストにとって自然は神自らの命名・表現であり、神の著した書物である。その自然という書物を gematria, 「ヘブライ語のアルファベット22文字の組み合わせ」等の技術を駆使して読み解く観照・瞑想を通して、彼らは隠れた神の本質に至ろうとする。そのようなカバラ的観照は、HHB の第19から20スタンザで揚言される。第19スタンザで詩人は、神の美しい被造物の書 ('a brasen booke') の中に、神の善・美を読みとることが神を「見る」手段であるとする。続く第20スタンザで 'this darke world' から、またその「世界」が発する 'damps' によって 'blynd' にされた 'soule' の状態から脱出・超越しようとする際の手段は

‘perfect speculation’, ‘heavenly contemplation’である。

この魂の盲目は、感覚への耽溺を意味すると同時に、*HL*の肉体的盲目と同じことを指す。故に、次の第21スタンザでは、神を「直接見る」ことは「出エジプト記」を連想させる表現で否定され、第33スタンザで詩人は‘Sapience’を崇拜するのみで、規定出来ないと語る。すなわち、第32スタンザまでにSefirot(流出)、神の創造した世界・宇宙の描写、神の規定・賛美の努力がなされてきたが、第33スタンザでその人間的行為は完全に放棄され、Brunoのカバラの「ロバ」と同じ「知ある無知」の表明がなされるのである。

先に簡単に言及したように、*HL*で既に提出されていた「32」は、カバラでは象徴的な数字と見なされる。カバラの *Sefer Yezirah* (創造の書)によれば、神はSefirotという10の原数(この場合は名ではなく単に数を意味する)とヘブライ語のアルファベット22文字から成り立つ「32のSophia(英知)の秘密の(不可思議な)道」を用いて万物を創造したと考える⁽⁴⁴⁾。これを継承したAgrippaは *De occulta philosophia* でこの「32」という数字に言及し、その数がヘブライの学者たちにとって知恵の道の数であると述べている⁽⁴⁵⁾。この「32」も「4」の8倍であり、「4」を基本としている。

つまり、*HHB*において「32」が神の可視的世界(Sefirot)を象徴し、「33」が神の不可知の形相(Ein-Sof)を表象する。また、この最後に位置する *HHB* を、*HL*の構造的数的支柱:「32」と「33」が支配することで、最初と最後を同じ数のシンボリズムで構成する円環構造を作り上げている。この数的構造・シンボリズムを作り上げるために、敢えて *HL*の第33スタンザの詩行を変更したのであり、*HL*のスタンザ数を1つ増やしたのであるとも言えよう。

さて、先の第16スタンザの「8」の問題に関して *Monas Hieroglyphica* という monad 論に言及したが、Deeと *Fowre Hymnes* との関係は違う視点からも明らかになってくる。

3. John Deeと *Fowre Hymnes*

前述の如く、*Fowre Hymnes* を天と地を上昇・下降する魂のグノーシスの長き旅と見なす時、それは大きなメタファーとして航海をイメージさせ、数の象徴から羅針盤が連想される。この羅針盤がDeeとの関係を暗示させる。

先の *HL* で提出された「32」は、惑星の運行を規制する数「32」、羅針盤の方位: 32(あるいは16)でもある。*Fowre Hymnes* 全169スタンザ中、顕著な数的シンボリズムを展開する第33番目のスタンザの前の総スタンザ数は「32」であり、‘Sapience’の問題を提起する153番目のスタンザの後の総スタンザ数は「16」である。さらに、全体は4つの賛歌であり、「4」は方位で言えば、大きな方位である東西南北のことである。そうすると、*Fowre Hymnes* は数のシンボリズムにより羅針盤を形成するとも言えよう。

それを実証するかのように‘compasse’(羅針盤)が *Fowre Hymnes* においても *HHB* の第11スタンザに登場する。不滅の天の美を求めて天界の旅(上昇)を続ける詩人にとって、この‘compasse’は宇宙の羅針盤と考えていい。最上位の「原動天」が他の天球層を包み込み、作動させる「その偉大な羅針盤(円)」が指し示す方向は彼方の神である。実は、*HL*の第11スタンザでも地上的美を求め、さまよう者の指針として光が語られていた。ともに旅を語る *HL* と *HHB* は、「11」という象徴的な数によって対応している。羅針盤は *The Faerie Queene* でも用いられるが、その代表的な例としてはBook VI, xii. 1. 7の航海のメタファーが挙げられる。そこでの航海は、妖精の女王に託された「口喧しい獣」(‘the Blatant beast’) 退治を果たすべき高い騎士Sir Calidoreの名誉ある旅をたとえる。

John DeeとSidneyのグループとの関係、そのグループとのSpenserの関係を考慮すれば、Deeの影響があっても不思議ではないことは先に述べた。Deeは、*General and Rare Memorials pertayning to the Perfect Arte of Navigation* (1577)と題する航海術の書を著した。この書の概要は航海の哲学・歴史であるが、その本質は「ブリテン帝権主義」をテーマとして展開する单子論にある⁽⁴⁶⁾。そのことを端的に象徴しているのが、この書のタイトル・ページの挿し絵である。エンブレム(ヒエログリフ)がルネッサンスに非常にもてはやされたことは周知の事実である。イギリスにおいては16世紀中葉からタイトル・ページを飾る挿し絵が単なる装飾ではなく、その本の要約・縮図、一種のエンブレムとして意図されるようになった⁽⁴⁷⁾。

Fowre Hymnes のタイトル・ページのエンブレム: 雲から出た神の手(Dextera Dei)が掴む錨は1596年の *The Faerie Queene* 第2版のものと同一であるが、その題銘《Anchora Spei》(希望の錨)及びその素材である「錨」自体が直截に「航海」を暗示させる。そ

して、このエンブレムの形は、Dee の *Monas Hieroglyphica* (1564) のタイトル・ページの単子の象形文字に近似している。だが、それよりも重要な両記号の一致点は双方が「十字」を含むという点にある。元来、「錨」はそれが十字を含むことから、キリストのエンブレムとして用いられた⁽⁴⁸⁾。Dee の十字記号は、カバラ的にとらえられた Pythagoras 派の tetraktys に還元され、これが *HHB* の象徴的数「8」の表すものであることは先に言及した。航海のメタファーや羅針盤はタイトル・ページのエンブレムとともに Dee の影響 (すなわち、カバラの影響) を示唆する。

このように *Fowre Hymnes* は非常に複雑な数秘術を用いて構築されており、カバラ、ヘルメス主義を語っていると考えられる。このカバラ、ヘルメス主義の確認は、その人間論の中核である人性三分説 (人間を肉体・魂・霊で構成されていると考える) を Spenser が受容していることを意味する⁽⁴⁹⁾。それは spirit の用法によって証明されるが、*HHB* の第 37 スタンザで、Spenser は意識的に 'soule' (魂) と 'spright' (=spirit: 霊) の両語を区別して用いている。これは彼が人性三分説を採用していることの大きな証左であると言える。

..., that it doth bereave
 Their soule of sense, through infinite delight,
 And them transport from flesh into the spright.
 (*HHB*37, ll. 5-7) 下線筆者

この詩行は、人が肉体と魂 (自然・宇宙に帰属させられている) を越えることで霊へ回帰することを語っている。*HHB* の第 42 スタンザの 'my hungry soule' の空腹は、*Amoretti* の 1 番と同じく魂の次元では天上への昇華は完成していないという飢えであり、霊的次元への上昇が問題とされている。Josten, French が、John Dee の *Monas Hieroglyphica* のもっとも重要なテーマをそう解釈したように⁽⁵⁰⁾、*Fowre Hymnes* の主眼は人間の霊的変容にあると言える。

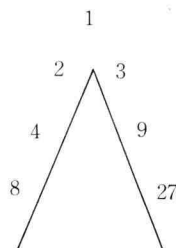
《注》

テキストとしては *The Yale Edition of the Shorter Poems of Edmund Spenser*, ed. William A. Oram, Einar Bjorvand, Ronald Bond, Thomas H. Cain, Alexander Dunlop, and Richard Schell (New

Haven and London, 1989) 版を定本とし、随時 *Spenser: Poetical Works*, ed. J.C. Smith and E. De Selincourt (Oxford, 1969), *The Works of Edmund Spenser: A Variorum Edition*, ed. C.G. Osgood et al., vol. 7 (Baltimore, 1943), 11 vols (1932-57) をそれぞれ参照した。

- (1) 以下、小論においては *Fowre Hymnes* の *An Hymne in Honour of Love*, *An Hymne in Honour of Beautie*, *An Hymne of Heavenly Love*, *An Hymne of Heavenly Beautie* をそれぞれ順に *HL*, *HB*, *HHL*, *HHB* と略記する。
- (2) A. Kent Hieatt, *Short Time's Endless Monument: The Symbolism of the Numbers in Edmund Spenser's 'Epithalamion'* (New York, 1960); Alastair Fowler, *Spenser and the Numbers of Time* (London, 1964); *id.*, *Triumphal Forms: Structural Patterns in Elizabethan Poetry* (Cambridge, 1970); *id.*, *Conceitful Thought: The Interpretation of English Renaissance Poems* (Edinburgh, 1975); Alexander Dunlop, "The Unity of Spenser's *Amoretti*", in *Silent Poetry: Essays in Numerological Analysis*, ed. A. Fowler (London, 1970), 153-69.
- (3) Jon A. Quitslund, "Spenser's Image of Sapience", *Studies in the Renaissance*, XVI (1969), 181-213.
- (4) *Three proper and wittie familiar Letters* [*Poetical Works* (1969), 609-32]. Frances A. Yates, *The Occult Philosophy in the Elizabethan Age* (London, 1980), 96, 103-7; Peter J. French, *John Dee: The World of an Elizabethan Magus* (London, 1972), 133-4, 136; Désirée Hirst, *Hidden Riches: Traditional Symbolism from the Renaissance to Blake* (London, 1964), 76-9.
- (5) Quitslund, 210-1.
- (6) Einar Bjorvand, "Spenser's Defense of Poetry: Some Structural Aspects of the *Fowre Hymnes*", in *Fair Forms: Essays in English Literature from Spenser to Jane Austen*, ed. Maren-Sofie Røstvig (Cambridge, 1975), 13-53. また, quarto 版も folio 版も、長過ぎる 4 行目を 'thousand' で区切り、'sword' 以下を字下げして 5 行目におくって

- る。
- (7) Bjorvand は Sir Thomas More の例を挙げている。More は初期の詩において第 8 スタンザの詩行のみ 7 行から 8 行へ変化させてそのスタンザのテーマ・表題である「永遠」(‘Eternity’) を「8」という数字の象徴性によって強調した。
- (8) Christopher Butler, *Number Symbolism* (London, 1970) 及び E.R. Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages*, tr. Willard R. Trask (Princeton, 1990); V.F. Hopper, *Medieval Number Symbolism* (New York, 1938). また、簡単に数のいろいろな象徴性を知るには Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, 2nd rev. edn. (Amsterdam, 1976); J.E. Cirlot, *A Dictionary of Symbols*, tr. J. Sage (London, 1962) などがある。
- (9) *Variorum Edition*, 521. また、Apuleius のテキストとしては Apuleius, *Metamorphoses*, ed. and tr. J. Arthur Hanson, 2 vols (Loeb Classical Library, 1989) を使用し, *The Golden Ass*, tr. Jack Lindsay (Bloomington, 1962) を参照した。
- (10) Bjorvand (1975), 28.
- (11) Robert Ellrodt, *Neoplatonism in the Poetry of Spenser* (Geneva, 1960), 85-6.
- (12) Edgar Wind, *Pagan Mysteries in the Renaissance*, rev. and enl. edn. (London, 1968), 58.
- (13) *De gli eroici furori*, II, iv [Paul-Henri Michel 版 (Paris, 1954), 427]; Wind, 53.
- (14) Yates, *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition* (London, 1964), 1-19. また, *Corpus Hermeticum* のテキストとしては *Hermès Trismégiste* I-IV, ed. A.D. Nock and A.-J. Festugière (Paris, 1946-54) を使用した (以下 N.F. と略記する)。
- (15) Yates (1964), 173.
- (16) Yates (1964), 259-62; Wind, 54.
- (17) ‘Sapience’ の正体に関する諸説は Quitsland, 181-4 及び *Variorum Edition*, 558-65 に概観できる。まとめると (1) Logos・神の心としてのキリスト [Padelford, R. Ellrodt, C.S. Lewis, J. Moreau], (2) 旧約聖書の知恵の文学におけるキリストと聖霊 [C.G. Osgood, R. Tuve, J.B. Collins], (3) 神の属性の擬人化 [E. Welsford], (4) カバラの Shekhina あるいは Matrona [D. Saurat], (5) ルネッサンスのネオ・プラトニズムの説く「知恵」[J.B. Flecher, W.L. Renwick, J.W. Bennet].
- (18) Bjorvand (1975), 41; Bjorvand *et al.* (1989), 746.
- (19) Fowler (1970), 184-6, 189; Curtius, 503.
- (20) Yates (1980), 95-7.
- (21) Hans Jonas, *The Gnostic Religion*, 2nd and enl. edn. (Boston, 1963), 224.
- (22) C.G. Jung, *Psychology and Alchemy*, tr. R.F. C. Hull (Princeton, 1980), 54-7.
- (23) S.K. Heninger, Jr., *Touches of Sweet Harmony: Pythagorean Cosmology and Renaissance Poetics* (San Marino, 1974), 210-1; Butler, 14-5. また, Platonic Lambda は次のように図解される。



- (24) Hopper, 964-5; Fowler (1964), 260-88.
- (25) *Corpus Hermeticum*, I (= *Poimandres*), 9 (N.F., I, 9); Kurt Rudolph, *Gnosis*, tr. and ed. R.M. Wilson (New York, 1983), 67-9; Yates (1964), 108-9; 柴田 有, 『グノーシスと古代宇宙論』(勁草書房, 1982), 14-5, 33.
- (26) *Corpus Hermeticum*, I, 25-6 (N.F., I, 15-6) 及び XIII, 15, (N.F., II, 206-7). また, 柴田, 44-5, 79, 84-5 を見よ。
- (27) Gershom Scholem, *Kabbalah* (New York, 1978), 19. カバラに関してはその他に Scholem, *Origins of the Kabbalah*, ed. R.J. Zwi Werblowsky and tr. Allan Arkush (Princeton 1987); *id.*, *Major Trends in Jewish Mysticism* (New York, 1941); Joseph L. Blau, *The Christian Interpretation of the Cabala in the Renaissance* (New York, 1944) を参照した。
- (28) Yates (1964), 108-10.
- (29) *Monas Hieroglyphica*, ed. and tr. C.H. Josten, *AMBIX*, XII (1964), 84-221 を定本とする。

- (30) Jung, 162.
- (31) Josten, 154.
- (32) Josten, 132; Scholem (1954), 100.
- (33) Abulafia については Scholem (1954), 126-7, 143. ルネッサンスのカバラがスペインのカバラであることは Yates (1980), 17-22 を参照.
- (34) 拙訳 (Josten, 156).
「そしてそのように、丁度そこには、さらに《8元数》が極めて密かに現出する。我々の先達の魔術師たちがかつてそれに気づいたかどうか私には疑問であるが、あなたはとりわけそれに注目するだろう」
- (35) 拙訳 (Josten, 158).
「さらに、慣習的計算方法に従って、《4元数》をカバラ的に展開すると、ピュタゴラス自身が常に言っていたように、要するに《10元数》がもたらされる。なぜならば、1, 2, 3, 4 は合計 10 となるからである」
- (36) Heninger, 205-6.
- (37) Josten, 107-8. また、Yates は Giorgi を引き合いに出してそう結論する [Yates (1980), 83-4].
- (38) Heninger, 369-72.
- (39) 黄道 12 宮は第 8 天にあるともされる (Rudolph, 68). Giorgi に関しては Yates (1980), 32-4, 99-101. Dee の蔵書に関しては French, 40-61.
- (40) Scholem (1941), 205-17; Scholem (1978), 94-109.
- (41) *A Variorum Edition*, 554-5; Bjorvand *et al.* (1989), 741.
- (42) Scholem (1941), 214-5; Scholem (1978), 106.
- (43) Scholem (1941), 225.
- (44) Scholem (1987), 25-6; Scholem (1941), 75-6.
- (45) Agrippa von Nettesheim, *De occulta philosophia*, Lib. II, cap. xv [*Opera*, vol. I (Hildesheim, 1970), 202, 2 vols]. ここで Agrippa はいろいろな数に関してコメントを施している.
- (46) Yates (1980), 85; French, 182-5; Margery Corbett and Ronald Lightbown, *The Comely Frontispiece: The Emblematic Title-page in England 1550-1660* (London, 1979), 48-56.
- (47) Corbett and Lightbown, 45.
- (48) Heather Child and Dorothy Colles, *Christian Symbols: Ancient and Modern* (London, 1979), 15-7, 190-1, 230-1.
- (49) ルネッサンスのネオ・プラトニズムが人性三分説を継承していることに関しては拙論「John Donne の *Songs and Sonnets* における涙の『円環』について」(「神奈川工科大学研究報告 A 人文科学編」第 16 号, 1992, 85-92) 及び「John Donne の *Elegies* について」(前掲誌, 第 17 号, 1993, 49-57).
- (50) Josten, 101; French, 76-7.